第3回 福井県こども・子育て応援会議 議事録

1 日　　時　令和7年1月29日(水)13:30～15:00

2 実施方法　対面(福井県庁地下1階 正庁)および オンライン

3 出席委員　委員名簿のとおり

4 事 務 局　福井県健康福祉部長、福井県健康福祉部副部長(こども未来)他

5 配布資料　別添のとおり

6 議事の経過および結果　以下のとおり

(1)開　会

健康福祉部長あいさつ

(2)議　事

【資料1、2、3、4】について事務局から説明

(3)意見交換

＜KPI に対する意見＞

[委員]

本気度が感じられる KPI になっている。民間企業を巻き込んで本気で取り組んでいってほしい。男性の家事参画という面で、学校で家庭科の授業が必修化になって以降、それらの年代の男性は家事労働時間が伸びている実態がある。幼少期、学生期だけでなく、大人になってからでも家事育児について、学んでいけるようなセーフティネットを設けていくことが大事。

[委員]

里親委託率を上げることはいいことなのだろうか。里親委託率の上昇を KPI に設けることは、こどもを持ちたいと思う県民を増やすという目標と相反するものでは。

(事務局)

こども達が家族と一緒に暮らせる環境が大事だと認識しており、県としても家庭支援事業といった形で政策を実施している。それでも一定数は、親と一緒に暮らせない子がいるのは事実。そういった子たちができるだけ家庭的な環境で育つことを応援していく。

[委員]

婚姻数の KPI について、民間とも連携してやっていくことが大事。行政支援による婚姻数のみでなく、県全体数も押さえるべき。

男性の育児休業取得率については、取得期間も含めて検討してほしい。

(事務局)

民間とも協力しながら希望する方への結婚支援を実施していく。今の目標は施策の推進と効果の検証をするための数値であると考えている。結婚支援は特定の価値観の押し付けになってはならないと考えており、希望者のニーズや障壁を把握しながら施策の推進、検証を続けていく。

男性の育休取得率の数字については、全国比較できるかどうかという観点も含めて検討していく。県としてはできるだけ長くとってもらえるような制度を推進していく。

［委員］
　医療的ケア児者の受入れ事業所数は、利用した人数にした方がよいのでは。事業所によっては、余力を十分に残したまま、受け入れ人数をおさえている場合があるため、利用した人数が多いか、少ないかで見た方が評価の項目としてはふさわしいと思う。また、医療的ケア児者のうち、１８歳以上の方は除いた方がよいと思う。

（事務局）
　現状把握が可能な数値として、人数を示すことができるか検討する。年齢別で区分できるかどうかについても検討したい。

［委員］
　夕方見守り協力店のKPI項目については、協力店だけでなく、協力団体も含めた方がよい。

［委員］
　地域の見守り活動は、推し進められることであるし、素晴らしい活動だと思っているが、一方で、家庭内や地域内の見えないところで、こども達が悲しい事案に巻き込まれている。行政として介入しづらい範囲のところにこそ光を当てていかなくてはいけないと思う。こどもが権利の主体であることを認識し、尊重していくことが大事。

＜計画全体への意見＞

［委員］
　「総合的な推進体制」のところで各機関と協力連携をしていくこととしているが、市町の青少年育成担当もこの中に入れていただきたい。

［委員］
　こども達を取り巻く環境は日々変化しているが、我々の団体としても、安心で安全なこどもの育ちに協力していきたいと思う。

［委員］
　幅広い世代の方のご意見を取り入れており、とても素晴らしい。これが計画段階で終わらないで実際に実現していくためには、私たち世代がフォローしていくことが重要。未来につなげていくように継続していくようにしてほしい。今後移住が増えるということもあるのでこの素晴らしい計画があるということを、私の立場でも伝えていきたいと思う。

［委員］
　これまでもそうであったように今後の５年間でも世の中は大きく変わると思う。適宜修正しながら実施していってほしい。保育士の数に関して、保育士養成という面で関わらせてもらっているが、現場として非常に苦しいところがある。数も大事だが、質を高めていくことも大事なので支援の充実はとても大事。保育士という仕事に誇りを持ってもらうというところをもっと強化できるような施策が重要ではないかと思う。
　また、子育てをしたいという男性が圧倒的に増えてきているという実感がある。一方でやり方がわからないという人は多くいるので、そういった方に寄り添ってあげるようなシステムがあるとよい。また教育の中で、こどもを持つこととか育てることを教えることもよいと思う。時代に応じて変化をしていってほしい。

[委員]
　婚姻件数は少なく見積もられているイメージ。これは成婚報告があった数値だと思うので、感覚としては実際の件数はもう少しあると思うし、明るい材料としてとらえていただきたい。やさしい版はきれいな色味で仕上がっている。学校のホームルームの時間などで、みんなでこれを見る時間があったらよいと思う。

[委員]
　県の計画は拡大路線に走りがちだが、人口減少時代に直面している現代においてどういった対応していくかということを直視しながら作っていかないといけないと思う。男女で家事育児を分担して行うことは極めて大事だと思う。県の取り組みとして、共家事を推進していると思うが、そういった認識が定着していくような文化が育まれていくとよい。

[委員]
　こどもは学校で過ごす時間が圧倒的に多いので、教育のことに関してもう少し触れてもよいかと思う。また、不登校のこどもへの対応も重要かと思うので、魅力的な学校づくりも含めて検討してほしい。また、動画サイト等に中毒になっているこどもも多い。とはいえ、今のこども達が大人になったとき IT の駆使は必須スキルであることから、スマホの使用と運動を通じた身体的な健康づくりなどはバランスが大事。

[委員]
　外国にルーツを持つ児童生徒に対する支援の項目については、支援員の配置だけでなく、本人が日本で生きていくうえで、日本語の学びがなぜ必要かということを本人、保護者に伝え、日本語を勉強する意欲を向上させていくことが大事。居場所は、場所だけではなく「人」そのものも居場所になると思うので人材育成の部分もやっていってほしい。県民アンケートにより居場所があると思うかの数値を集計しているが、意見を言えないこども達がいることを認識し、調査対象の母数や実績値のとらえ方も検討してほしいと思う。

[委員]
　計画はわかりやすく、読みやすかった。この計画を実現していくためには、横のつながりがすごく大事。こどもを取り巻く活動の分野は多岐にわたるため、横でつながるということが重要になってくる。総合的に見ていかないといけないというところをすごく感じた。また、夢とか希望の応援という文言には、夢や希望を「持つ」ということを応援するということも大事。

[委員]
　保育士・保育教諭も子育てをする保護者の一員であるので、そういった人たちも応援される側であることをぜひ皆さんにも認識してほしい。

[委員]
　子育てに対してポジティブに感じていただけるような、打ち出し方をお願いできたらと思う。福井は PR 発信力が弱い。子育てに充実した県であることが、県民にも感じていただけるような形の発信をお願いしたい。

[委員]
　以前、フィンランドの保育施設を視察した際に、保育施設に父親がたくさん迎えに来ている光景があった。日本でもこの光景が見られるにはどうしたらいいか考えた時に、男性も女性も社会全体の働き方が変わっていったり、育休制度が普及していったりしていかないといけないと思った。計画が実現に向かうことを願っている。
　今回の計画の周知はとても大事であり、さまざまな施策の認知度が出生意欲に関係してくる、という話もあったように施策があるということをわかっていただくための取組も大事。
　こどもも大人と同じく権利の主体であり、擁護が図られなければならないという認識を県全体に示していかないといけないと思う。

（アドバイザー）
　大きく３つコメントさせていただく。
　１つ目は計画策定のプロセスについて、高く評価されるべきと思う。1万2千人もの県民から意見を聴取し、その６割をこども・若者が占めているという点は、画期的といっていいのでは。特に特別支援学校や盲学校の生徒との意見交換、ひとり親家庭、医療ケアが必要なこどもの保護者との対話は、重要とよく言われるが、なかなか実現されてこなかったものだと思う。多様な立場の方々の声を丁寧に集め、計画策定に生かすことができたということは非常に重要なポイントになっていると思う。
　２つ目は施策の内容について。特に少子化対策ということになると、お金をかける話になりがちだが、現金給付のような施策というのは、必ずしも子育てないしは出生率にとって効果的ではないということがわかってきている。従って、今回の計画策定に盛り込まれたような、保育の質の向上や、こどもたちの全天候型遊び場の整備といった具体的なサービス提供を重視されている点はとても良いと考える。
　３つ目、子育ての喜びという視点が打ち出されている点も素晴らしいと思う。社会全体で子育ての喜びを共有して次世代につないでいくという理念は、持続可能な少子化対策として重要だと感じる。
　一方で課題として指摘したいのは、実効性の確保の点。特に男性育休取得率は 85% という高い目標を掲げているが、これを実際に達成するには、企業の理解と協力が不可欠になる。経済界との連携を強化し、育休取得促進のための支援策について、より踏み込んだ取り組みが必要になると思う。とはいえ、新たな施策が必ずしも必要というわけではなく、今ある素晴らしいものを認知・活用してもらうということが大事になってくると思う。